

# 流通経済大学vs関西学院大学

12月21日(日)  
11:00K.O.  
味ファイ西

着実にトーナメントを勝ち上がってきた流経大。大会前から、「インカレでは絶対に優勝する」と、中野雄二監督はことあるごとに宣言。その言葉どおり、決勝戦までコマを進めた。「最悪、引き分けでもいい」（中野監督）という割り切った戦いで、実際に2回戦、準々決勝と延長戦、PK戦と接戦に次ぐ接戦。しかし、そういった苦しい戦いをモノにするだけの自信が現在の流経大にはある。「インカレに向けて、守備のところをしっかりとやってきた。その成果が出ていると思う」（中野監督）

ここ2年のデータをとっても、7試合でPK戦を行い、いずれも勝利。外した選手が一人しかいないという驚異的な内容だ。PK戦まで持ち込めば、絶対に勝つという心理的要因が、さらにチームに粘り強さをもたらしている。「流経大としては過去4回、準決勝で負けていたので、どうしても勝ちたいということは学生に話してきた。学生が頑張ってくれて勝てたのでよかった」（中野監督）

一方で準決勝のびわこ大戦は、4-0と相手を圧倒した。「立ち上がりは両者にチャンスがあった。びわこ大のパーに当たったシュートが入っていれば、展開は違ったかもしれないし、大差もつかなかっただろう」（中野監督）

今年の流経大の集大成といってもいい好ゲームだったが、これを決勝戦でも続けることができるか。

「登録メンバーの誰を起用しても差があまりないので、いろいろな組み合わせで一戦一戦やってきた。さまざまなチャレンジをさせてきた。疲労感を持っていない。そして、インカレに向けた新しい戦い方にトライしてきたことにより、大会の中でチームとして成長したのかもしれない」（中野監督）

リーグ戦ではなかなか結果を残せず8位に終わったが、終盤は7試合負けなし(2勝5分)。攻撃的な守備を徹底させてきたチーム作りが、間違いなく花開いている。

「カップ戦に関していえば、攻撃主体にするともろさも出る。決して今のチームは守備ベースではないが、攻撃的な守備からサッカーを考える」（中野監督）

総理大臣杯でも優勝し、トーナメント戦の勝ち方を熟知しているからの戦法。初優勝、2冠まであと1勝だ。

「どのような展開になるかわからないが、関学大とは総理大臣杯準決勝で0-0の末にPK戦で勝利したため、決着がついていない。強いというのが正直な印象」（中野監督）

インカレ決勝は延長で決着がつかない場合、両校優勝となるが、果たしてその辺の考え方は？

また、関学大は徳永裕大(2年)、小林成豪(3年)が出場停止だが、「7月12日に行われた天皇杯2回戦では、徳永、小林、呉屋大翔(3年)不在の状況で勝利を取めているだけに、チーム力に影響があるかどうかはわからない。とにかく、しっかりと勝ちきるだけだ」（中野監督）

関西リーグを制した阪南大を破り、同じく初の決勝進出となった関学大。

「阪南大と全国大会の舞台で戦えるということで、選手もスタッフもモチベーションが高い中で準備してきた」（成山一郎監督）

今シーズン、阪南大に対して負けていないとはいえ、関西リーグでは8ポイントの差をつけられ3位。その悔しい思いは確実にあったものの、いざふたを開けてみれば前半2分という早い時間帯に、CKから失点してしまった。

「阪南大と対戦するときは、いつも先制点を取られていることもあり、ある意味で取られ慣れていた。阪南大との試合は、いつも我慢強くやらないと勝てないということもわかっていた。選手たちも早い時間帯だったので、慌てずに粘り強くやってくれた。呉屋がかなりマークさ

れていた。呉屋に引きつけられてあいている選手に、ショートパスという形をとった。前半はそのやり方でまあまあできていた」（成山監督）

前半のうちに同点に追いつくことはできなかったが、焦りはなかったというから驚きだ。「後半もこのやり方を崩さずにやった。阪南大は強いので、前半の集中しているときに、決定的なチャンスを作れると思っていた」（成山監督）

一進一退の攻防の中から、後半13分と比較的早い時間に、徳永に代えて森俊介(2年)を投入。そして、阪南大の足が止まってきた27分、小幡元輝(4年)のクロスで呉屋がヘディングで決めて、試合を振り出しに戻した。

ここで一気に勢いをつけたかったが阪南大も譲らず、その後も膠着状態。しかし42分、呉屋のスルーパスに池田優真(3年)が抜け出し、相手GKと1対1。これを冷静に決めて逆転に成功し、そのまま試合を終え決勝戦に進出した。

劇的な勝利だったが、「阪南大をライバルというのはおこがましい。それだけ強い。阪南大と試合をして、反省して、チームが強くなっていく。いつも鍛えてもらっている感覚だ」（成山監督）

と相手を称えたが、負けていないという自信が最後の1点を生み出したのかもしれない。

「最後まで諦めずにやってくれた。よく頑張ってくれた。0-1は許容範囲内だった。チャンスが来たときに決めることができたことはよかった。シュートシーンを作り出すことはできていなかったが、落ち着いて試合に集中していた」（成山監督）

チームが精神的に充実しているといえるだろう。「それでもボールのスピード、シュートのスピードは遅い。ノリや勢いだけでなく、阪南大との試合は質が大事になる。質を上げて行こうという話をハーフタイムにした。中盤で主導権を取れないと難しかった」（成山監督）

この決勝戦でも、もう一段高いプレーが求められるのは間違いない。「決勝で勝つために全部員で取り組んできた。勝ったときにみんなで喜ぶことだけを想像して、準備していきたい。決勝の舞台は初めてだと思う」（成山監督）

大会を通じて、チームの一体感が増している関学大。「まとまりがどんどん強くなっている。メンバーに入れない選手、出られない4回生が現実的にいる。いろいろな人のおかげでプレーできているということも、普段は言葉でいっても感じることはできないが、今はひしひしと身にしみて感じている。だからこそ、苦しいときも頑張れていると思う。そのように感じることができているのは、いいことだ」（成山監督）

あと1勝に迫った優勝に向けて、チームが一つになるだけだ。

大会を通じて、チームの一体感が増している関学大。「まとまりがどんどん強くなっている。メンバーに入れない選手、出られない4回生が現実的にいる。いろいろな人のおかげでプレーできているということも、普段は言葉でいっても感じることはできないが、今はひしひしと身にしみて感じている。だからこそ、苦しいときも頑張れていると思う。そのように感じることができているのは、いいことだ」（成山監督）

あと1勝に迫った優勝に向けて、チームが一つになるだけだ。

流経大		関学大	
4. 鈴木	8. 西谷	26. 池田	23. 原口
3. 田上	20. 江坂	5. 前川	
25. 古波津		13. 呉屋	14. 福富
1. 中島		8. 浅香	21. 村下
27. 塚川		11. 森	
18. 今津	13. 山岸	3. 井筒	
2. 湯澤	29. 渡邊	10. 小幡	4. 福森

※布陣は準決勝の布陣を参考にした予想

## イベント協賛企業



## 平成26年度 第63回全日本大学サッカー選手権大会



# 展望 OFFICIAL MATCHDAY PROGRAM

編集：加茂郁実 発行：(一財)全日本大学サッカー連盟 協力：関東大学サッカーサポーターズクラブ

## ともに初優勝を狙う流経大と関学大、栄冠はどちらに!?

いよいよ決勝戦を迎える「平成26年度 第63回全日本大学サッカー選手権大会」。準決勝は対照的な2試合となった。

まず、びわこ大と総理大臣杯との2冠を目指す流経大の一戦は、戦前の予想を覆して大差がついた。

開始20分に流経大が先制点を奪い、その後は膠着状態となったが、後半は一気に流経大のペース。18分に2点目を奪うと34分、38分に加点し、4-0でびわこ大を下した。

「純粋に力の差が出た。もっとゆっくりゲームを進めてくるかと思っていたが、激しく来たので中盤の選手の役目をかき消す形になった。そこで中盤の選手も対応し切れなかった」（望月聡監督）というびわこ大はベスト4で姿を消した。

もう一方は、関西リーグ等で何度も対戦している関学大と阪南大の一戦。開始2分に阪南大が先制点を奪ったが、そこからは一進一退の攻防。後半、メンバー交代を行いながらリズムをつかん

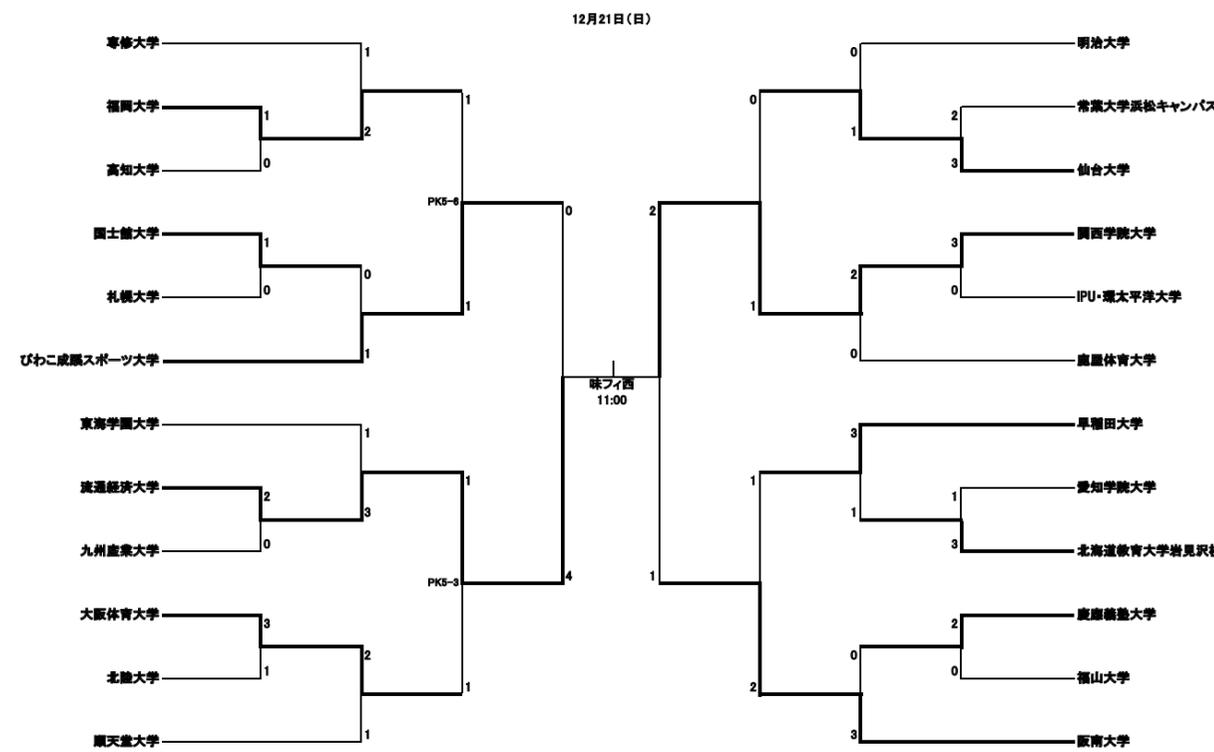
だ関学大は、27分に同点に追いつくと42分にもゴールを奪って2-1の逆転勝利を収め、決勝戦に進出した。

「前半の途中、風にかけてボールを全然拾えなかった時間帯があったが、よく耐えたと思う。後半、少し有利になったが攻め切る力が足らなかった。いいボールが何本もあったが、そのまま持ちこたえられなかった」（須佐徹太郎監督）

阪南大は自慢の攻撃力を発揮できなかった。決勝戦のカードは、流経大と関学大という関東、関西決戦となった。どちらも勝てば初優勝。流経大は総理大臣杯との2冠もかかっている。注目のキックオフは11時！

なお、この試合の様子は12月21日(日)深夜1:10~Get Sports内で(一部地域を除く)、12月25日(木)、29日(月)の午後5:00~CSテレ朝チャンネル2にて録画放送予定。

## 平成26年度 第63回全日本大学サッカー選手権大会



結果速報、出場チーム情報等、見どころ満載!!



インカレ公式HP: <http://www.jufa.jp/>



Twitter: @JUFA\_soccer



Facebook: 「全日本大学サッカー連盟」